
目 次

『モモ』を読む (第2回)

第 8 章 金融システムの批判

第 9 章 お金の根源

第 10 章 科学知と芸術知

<地域通貨> LETS とは何か

後 記

編集人 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱169号
貿易研究会

ホームページのURL <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

Eメールアドレス kyw04500@nifty.ne.jp

会 費 正 会 員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

会費振込先(郵便振替) 口座名 : 資本論研究会

口座番号 : 01090-5-67283

『モモ』を読む(第2回)

第8章 金融システムの批判

1) お金とは何か

『エンデの遺言』(NHK 出版)は、金融システムを批判したエンデの次の言葉から始まっています。

「どう考えてもおかしいのは資本主義体制下の金融システムではないでしょうか。人間が生きていくことのすべて、つまり個人の価値観から世界像まで、経済活動と結びつかないものはありません。問題の根源はお金にあるのです。」(『エンデの遺言』14頁)

この言葉は、エンデが亡くなる1年6ヶ月前、1994年2月6日のものでした。そうです。晩年のエンデはお金と金融システムについて必死に研究していたのです。エンデは、貨幣の歴史を調べ、金、銀といったそれ自身に価値のあるものから紙幣の発明にいたり、さらにコンピュータに記録されている数字が加わる、といった変遷について述べたあと、国家紙幣と銀行券の区別について興味のある事実を述べています。

「その後、紙幣は全く別の道をたどり、銀行券となりました。この銀行券というものは、とても興味深いもので、私は10人の法律家に手紙を書き、法律的地から銀行券とは何かを尋ねました。それは『法的権利』なのか、国家がそれを保証するのか、もしそうなら『お金』は経済領域には属さず、法的単位ということになります。『法的権利』なら商いの対象にはできません。しかし、そうではなく経済の領域に属するものなら、それは商品といえます。10人

の法律家からは10通り返答がきました。つまり、法的に見て、銀行券とは何かを私たちはまるで知らないわけです。定義は一度もされませんでした。だからこそ、『お金』は一人歩きするのです。」(同、25頁)

国家紙幣は国家が保証するもので、貨幣金のシンボルであり、一国の流通に必要な貨幣金の量と同じ額の紙幣が発行されておれば、金貨と同じ価値をもつことができます。しかし、それは金銀とちがって増発することができるので、国家は財政が不足し始めるとつい増発することになり、そうなるとインフレになって紙幣の価値が低下します。

他方、銀行券はもともと私営の銀行が発行する預金証書でした。だが、企業や個人の預金口座を引き受け、それでそれぞれの取引を口座の振替で決済することが出来るようになり、預金は貨幣として使われ始めます。このシステムが銀行を作り出し、この支払決済システムを土台にして信用制度が発達してきますと、大口の取引は、債権・債務関係を相殺する預金通貨という信用貨幣でなされるようになります。

そうすると、銀行券は小口の取引からなる最終消費材の売買に使われるようになります。銀行はやがて商業銀行と発券銀行とに分化し、発券業務は中央銀行の占権事項となるとともに、中央銀行券が法貨とされます。こうして、今日の日銀券は日本銀行が発行した信用貨幣ですが、同時に日本国政府が法貨としてあり、国家紙幣としての性格ももっています。

このようにお金について、色々説明はできるのですが、エンデも言うように、銀

行券とは何か、お金とは何かと問われると、誰もきちんと答えられません。

2) 現代のお金の弊害

お金とは何かということに答えられはしませんが、しかし現代社会でお金が果しているよくない役割については逐一述べる事ができます。

エンデは、貨幣経済が自然資源と調和していないことについて色々あげています。例えば経済理論では地中に眠る資源や熱帯雨林はまだ経済的要因ではなく、掘り出され、伐採されてはじめて経済的要因とされますが、これでは資源の浪費を起さざるを得ません。あるいは短期的利益のために、畑を荒らし、土壌を不毛にすることになります。

「つまり、非良心的な行動が褒美を受け、良心的に行動すると経済的に破滅するのがいまの経済システムです。この経済システムは、それ自体が非倫理的で、私の考えでは、その原因は今日の貨幣、つまり好きなだけ増やすことができる紙幣がいまだに仕事や物的価値の等価代償だとみなされている錯誤にあります。これはとうの昔にそうではなくなっています。貨幣は一人歩きしているのです。」

今日の金融システムが人間の生活にもたらしている弊害、これについては多くの方が認めざるをえなくなっています。ところがどうすればいいか、ということになると明確な答えはありません。そこでエンデは、貨幣システムの変革を提案しています。

「重要なポイントは、パン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金とは、二つの異なる種類のお金であるという認識です。大規模資本としてのお金は通常マネージャーが

管理して最大の利潤を生むように投資されます。そして資本は増え、成長します。とくに先進国の資本はとどまることを知らぬかのように増え続け、そして世界の5分の4はますます貧しくなっています。というのもこの成長は、無からくるのではなく、どこかがその犠牲になっているからです。そこで私が考えるのは、再度、貨幣を実際になされた労働や物的価値の等価物として取り戻すためには、いまの貨幣システムの何を変えるべきなのか、ということです。これは人類がこの惑星上で今後も生存できるかどうかを決める決定的な問いであると、私は思っています。」(同、28~9頁)

この貨幣システムの変革の一例として、エンデは、シルビオ・ゲゼルの老化する貨幣論とヴェルグルでの実行例とをあげています。ゲゼルは、お金で買ったものは消費され老化していきますが、お金はそうならないところに問題があると考え、スタンプ紙幣を考案しました。それは毎月定められた日に定められたスタンプを紙幣の裏に貼り付けないと通用しないものでした。この紙幣は、スタンプの欄が埋まってしまうと死んだと見なされ、回収されます。

ヴェルグルでは1929年の世界大恐慌後にこのスタンプ紙幣が導入され、大きな成果をあげましたが、オーストリア政府は権力でこの試みを止めさせてしまいました。

今日では利子のつかない地域通貨の試みが世界各地でなされています。『エンデの遺言』でも、イサカアワーや交換リングなどが紹介されています。LETSについてはあまり触れられていないので不満が残ります。けれどもこれは別の物語、いつかまた別のときに話すことにしましょう。

3) お金の商品化が問題

エンデはゲゼルの老化する貨幣という考え方とスタンプ紙幣の実践に大きな意義を認めています。しかしそれで問題が解決するかと考えていたわけではありません。「私たちがいつも耳にする提案は、システム自体は変えずにそれをちょっと賢くするとか、システムがもたらす結果を少しあとにずらそうというものばかりです。」(同、30頁)と不満を述べているエンデにとって、なすべき課題は金融システムの変革であり、そのためにはシステムの変革案の他に、メンタリティの変革も必要ですが、後の方が大変だとみえています。

とまれ、エンデは金融システムの変革の中身について次のように述べています。

「私の見るところ、現代のお金もつ本来の問題は、お金自体が商品として売買されていることです。本来、等価代償であるべきお金が、それ自体が商品になったこと、これが決定的な問題です。そのことにおいて、貨幣というもののなかに、貨幣の本質を歪めるものが入るのではないのでしょうか。これが核心の問題だと思います。もっとも、これは私の考えであって、経済学者は別意見かもしれません。」(同、35頁)

お金自体が商品として売買される事態について分析したのは、マルクスの『資本論』第三巻でした。ゲゼルはマルクスの貨幣論について批判していますが、(同、106~116頁)マルクスが貨幣の商品化を論じた第三巻を参照していないのですから、批判的外れに終わっています。そして、ゲゼルには、利潤と利子との区別が理解されていないので、資本がもたらす剰余は全てが利子だとされています。

エンデの考えは、マルクスが利子生み資本論で展開した現実資本と架空資本につい

ての理論と一致しています。そこでマルクスの理論を簡単に紹介してみましよう。

今日産業の分野では資本が生産の担い手になっています。産業資本とは産業の分野に投下された資本のことですが、こうなったのは、近代以降のことでした。古代や中世にあつては、人間は産業資本が発生するような条件を許してはいなかったのです。でもそれまでも貨幣は存在し、資本も存在していました。高利貸と商人がその担い手でした。高利資本はその当時は今日の消費者金融よりも高い利子をとっていたのです。

ところが、産業の分野に資本が投下され、労働者を雇用して生産がなされる時代が始まりました。灰色の男たちの命令を自分の意志であると思ひ込む企業家たちが登場し、産業の工業化と社会の近代化を成し遂げ、絶え間のない技術革命による生産力の増大を実現しようとしています。この時代に、貨幣の貸し手は、企業家に投資をするようになりました。こうして、高利資本に代わって、近代的利子生み資本が登場し、産業の発展とともに力をつけてきます。

貨幣の貸し手にとって、消費者に貸すよりも企業に投資する方が金額も大きく、リスクも少なくなります。また、企業も、融資によって大きくなることで、同業他社との競争に優位にたてますが、しかし、企業があげる利潤以上の利子を払うわけにはいきません。貸し手自体が企業となり、金融機関となって、金利生活者以外の人々や企業からの預金を受け付け、貸付可能な貨幣の量を増大させました。そこで、利子率が引き下げられるとともに、高利を禁止する利息制限法が設けられることとなります。実はここまでは、まだモモの物語の世界でした。ところがモモの敗北で様子が違ってきます。

4) お金の商品化の実情

60年代末にたびたびドル危機がありました。当時の国際通貨ドルは、各国通貨と固定したレートで交換されていましたが、第2次世界大戦後のヨーロッパと日本の戦後復興によって、世界経済における各国のバランスが変化し、ヨーロッパと日本の製品がどんどんアメリカに輸出され始め、ヨーロッパや日本にはドル債権がたまっていったのです。

当時ドルは、国内通貨としては不換紙幣でしたが、国際通貨としては金とリンクしていました。そこで各国はインフレ気味のドル債権を抱えているよりも世界貨幣として通用するそれ自身価値物である金の方を選好し、アメリカから金が流出したのです。

物語のなかでは灰色の男たちは葉巻の煙という毒でマイスター・ホラを脅したのですが、現実には、金の流出とドル紙幣の減価が世界を脅したのです。マイスター・ホラが妥協し、1971年にニクソンは、金・ドル交換停止を決定します。これが金融システムの危機を、産業資本（現実資本）の見地からではなく、利子生み資本（架空資本）の見地からシステムを改革することで、乗り越えることを意味していました。ここで灰色の男たちは、一人一人から時間を盗む現実資本から、人間の時間をまとめて盗む架空資本へと進化したのです。

これまでは、人間はせつせと働いて生活費以外は全て時間貯蓄銀行に預ける、という形で時間を盗まれてきました。ところが以降は、人間は生きるためにはまず時間貯蓄銀行から時間を借りなければならなくなったのです。人間だけでなく、産業でもそうになりました。

産業資本に貨幣を貸し付ける利子生み資本は、資本を商品化します。この場合、資

本は貨幣資本ですから、現実には貨幣が商品として売買され、債務証券が商品に、利子はその価格とみなされます。また、株式会社に投資する場合は株式が商品に、配当を資本還元した額がその価格とみなされず。

お金が商品となるといっても、お金がお金と交換されるわけではありません。お金を借した証書、あるいは投資した証書、いわゆる利付証券が商品として売買されるのです。だから、お金が商品化されると、その商品の本性は、将来の生産に対する請求権だということになります。さらに利子は将来の利益に対する請求権であるにもかかわらず、その利益が実現する以前から支払わねばなりません。このような商品化されたお金は、商品の売買で流通しているお金とは全然別の性格をもっています。

パンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金を、二つの異なる種類のお金と捉え、お金自身が商品となったことが決定的な問題と考えているエンデの直感、すでに述べてきたマルクスの理論を踏まえたものと言えるのではないのでしょうか。

5) 変動相場制と投機の常態化

再度現実にもどりましょう。灰色の男たちが産業資本から利子生み資本へと進化した以降の世界はどうなっているのでしょうか。

ドル金交換停止以降、試行錯誤の末、変動相場制に移行します。各国通貨の交換レートが固定したものではなくなったことで、外国為替の売買で差益を稼ごうとする投機取引が増大してきました。

他方、コンピュータの発達で、金融機関のオンライン化が進み、80年代後半には各国の国際金融機関もオンラインで結ばれ、

投機のための技術的条件が整えられました。外国為替の売買は従来は国際貿易にともなって発生するものでしたが、今日では圧倒的に投機取引の方が多くなっています。今では昔話になってしまいましたが、80年代末には日本の金融機関が世界のトップクラスにランクされるようになり、その頃の銀行は、ディーリングルームを通じた投機で、巨大な利益をあげるようになっていたのです。

その後投機の技術も進歩し、デリバティブという手法が編み出され、ソロスのヘッジファンドが大儲けしたという話がありました。それも旧聞となり、アジア金融危機を経た今日では、金融システムの暴走をどのように規制するかということが、金融システムの当事者たちの頭にすらのぼるようになってきました。そして、後進国への債権の棒引きを提言しているジュピリー2000の活動がNGOにとって焦点となってきています。灰色の男たちの発生する条件について、人々は意識しはじめていないのでしょうか。

第9章 お金の根源

1) マルクス主義の問題点

エンデはマルクス主義について、彼の資本主義に対する批判の正しさを認めながらも、しかし問題を解決していく方法については誤っていたと述べています。

「マルクスの最大の誤りは、資本主義を変えようとしなかったことです。マルクスがしようとしたのは資本主義を国家に委託することでした。つまり私たちが過去の70年間、双子のようにもっていたのは、民間資本主義と国家資本主義であり、どちらも

資本主義であって、それ以外のシステムではなかったのです。社会主義が崩壊した原因はここにあるでしょう。」(同、40頁)

エンデも別のところで述べているように、マルクス主義はプロレタリア階級の階級闘争を発達させて、ブルジョア階級を打倒し、国家権力を掌握しなければ社会革命は始められないと主張していました。この考えのもとに出来たのが、ソ連をはじめとする社会主義諸国でした。社会主義諸国になっても新しい社会になっていないということで、スターリンが革命を裏切ったというスターリン主義批判がなされたりもしました。しかし批判勢力が事態を改善できないまま、80年代末から90年代初めにかけて共産党の支配は足元から崩れていったのです。

この事態に対して「資本主義を変えようとしなかった」と指摘されれば返す言葉はありません。結果として、マルクス主義の共産党は、資本主義を変えられなかったのですから。とはいえ、マルクスもマルクス主義者も主観的には資本主義を変えようと考えていました。ですから、エンデの評価は、マルクスには資本主義を変革していくための実践において誤りがあつた、という主旨として受け止めるべきでしょう。

ところが、本には出ていませんが、映像の方には、エンデが、マルクスの理論を資本主義を分析していく理論として非常に高く評価している旨の発言が収録されています。「マルクスの偉大な功績は、経済批判を可能とする概念自体をつくり出したことにある。」(ビデオ『エンデの遺言』より)そうです。マルクスの『資本論』の商品の章には、商品を分析して、商品から貨幣がどのように生成されてくるかが明らかにされています。この分析がいま顧みられるべきときを迎えています。

2) お金の秘密

エンデは「お金は人間がつくったものです。変えることができるはずです。」(同、41頁)と述べています。とはいえ、エンデは人間がどのようにしてお金をつくりだすか、については明らかにしていません。もしマルクスが商品論で書いた内容をエンデが知ったら、どんな物語が出来たでしょうか。『モモ』で資本による人格に対する意志支配を見破っていたエンデのことですから、お金がどのようにしてつくられるかということも理解不能ではなかったはずですよ。

貨幣は経済学では通常、物々交換の不都合を回避するためにつくりだされた交換手段とみなされています。諸商品は商品同志の直接交換は困難なので、一度貨幣に代えておけば、欲しい商品が何でも買えるというわけです。でもこれではお金の秘密は何も明らかになっていません。

マルクスは、商品—貨幣—商品という交換の形式で、商品と貨幣が交換されるときの両者の同一性(共通性)に注目します。また、日銀券などの通貨は、貨幣の流通手段としての機能を代行しているもので、それ自体商品ではありませんが、貨幣金の方は商品です。それで、マルクスは、商品それ自体に貨幣の性格がそなわっていると見て、このことを商品と商品との交換関係の分析から証明しようとした。いわゆる価値形態論で貨幣の秘密が明らかにされています。

マルクスは小麦と鉄という二つの商品の交換関係を分析し、両者が交換可能である以上、両者には同一性があると見、これは商品の価格として表示されている交換価値ですが、この価値の実体を社会のなかで成立している抽象的人間的労働、人間労働一

般であることを示します。要するに、色々な商品が交換されているのは、それぞれが人間労働一般という共通性においてであって、たとえ労働生産物ではないものでもこの尺度をあてられるのです。

次に小麦と鉄との交換関係をマルクスは価値の現象形態、つまり価値表現の関係と見えています。二つの商品の交換関係のなかに人間労働一般という捉えがたいものが現象している、というのです。小麦と鉄とがお互いに交換可能なわけですから、小麦も鉄も、相手のなかに自分に等しいものを見えています。小麦は小麦、鉄は鉄ですから、この商品の使用価値は異なったものです。だから小麦は鉄を人間労働一般という抽象的で見えないものと見えています。そして、小麦は鉄と等しいという交換関係を結ぶことで、自身が抽象的人間労働としての鉄と等しいことを示しているわけですから、こうした回り道をして小麦も抽象的人間労働の担い手であることを明らかにしています。でもこうした事態は目に見えないのです。

この交換関係を人々の日常感覚にそって見直してみましょう。まずこの小麦と鉄との交換関係は、商品小麦の生産者が鉄となら交換してもよいと考え、他方、商品鉄の生産者がその意志にかかわらず、鉄が小麦と直接交換可能となっているということでした。鉄の生産者に小麦を購買する力がそなわるのは、小麦の生産者が鉄となら交換してもよいという交換関係を示したからでした。

マルクスは何故鉄の生産者に購買力がつくのか、ということを目に見えない価値の現象形態を頭の中で組み立てることによって証明します。先に見たように、小麦の鉄との交換関係で、小麦は異なる使用価値鉄に抽象的人間労働としての鉄を見、これと等しいものとして関係したのでした。だか

ら、この価値関係で、鉄は鉄としての質ではなく、抽象的人間労働の体化物としての鉄として扱われているのです。つまり鉄は、鉄という質をもったまま、この関係の中では抽象的人間労働の体化物とされており、したがって、ここでは、鉄は抽象的人間労働の化身なのです。

お金の秘密はここにあります。お金は商品金が抽象的人間労働の化身とされ、価値の化身とされることで、あらゆる商品を買う購買力を持つことができるのです。

3) 商品からの貨幣の生成

小麦と鉄との交換関係のなかにすでに貨幣の秘密が明らかにされましたが、しかしまだ、鉄は貨幣ではありません。それはたまたま小麦の生産者の欲望の対象であったことで、小麦の購買力を得ただけでした。

でも小麦の生産者は、設備資材のための鉄の他にもいろいろな商品が必要です。それで彼は、色々な商品に貨幣の力を与えていきます。そのとき、小麦の生産者と反対側の商品の生産者たちのことを考えてみましょう。小麦の生産者から持ち掛けられた取引に、反対側の商品の生産者たちが応じていったとき、反対側の商品の生産者たちが小麦と交換したいと考えている、という関係が浮かび上がってきます。

この関係は、小麦以外の商品の生産者たちが、自己の商品を、単一の商品小麦と交換しようとする関係であり、あらゆる商品が小麦で価値を表現している関係です。こうなると、全ての商品の働きかけで小麦だけが抽象的人間労働の体化物とされ、他の全ての商品を購入できることとなります。

ところがどの商品生産者も、自分の商品で全ての他の商品が買えればよいと考えます。皆が同じことをするわけですから、自分の商品を貨幣にすることとは、単な

る主観的願望に終わり、統一的な秩序は形成されません。

全ての商品生産者たちが、単一の商品で価値を表現すれば、その単一の商品が貨幣となり、商品世界に統一的秩序が生まれる、商品たちはこのようなサインを人間に送っています。このサインを受けとって、不本意ながらも人々が、単一の商品金で、自分たちの商品の価値を表現したとしましょう。そうすると、ここで商品金は貨幣となります。

この貨幣を生成する商品生産者たちの行為を考えてみましょう。商品生産者たちは単一の商品金で自分の商品の価値を表現しました。だからこれは共同行為です。ところがこの共同行為は商品からのサインを受けとったうえでのものでした。人間は商品に自分の意志をおき入れて、かの共同行為をなしとげたのでした。約束ごととして行為したわけではありませんから、この貨幣生成の共同行為は商品生産者にとっては、無意識のうちに行われる本能的共同行為だ、ということになります。お金はたしかに人がつくるものですが、そのつくられ方は、商品に意志を支配されてつくりまします。だから、お金を変えるのは簡単ではありません。

4) お金は毎日つくられる

お金がどのようにつくられるかといっても、お札がどうやってつくられるか、ということではありません。商品を買う力がお金にどのようにそなわるか、ということでした。お金が商品生産者たちの無意識のうちでの本能的共同行為で生成されたものであることが判明し、そして、お金の商品を買う力は、商品生産者たちがお金で自分の商品の価値を表現することによってもたらされるものであることがわかると、実はお金とは、毎日つくり出されているもので

あることがわかります。毎日つくりだされているから、お金を発生させる条件がなくなれば、お金もなくなってしまうでしょう。

商品生産者は、生産物を市場にもってきて価格をつけます。価格をつけるということは、自分の商品の価値を貨幣で表現することでした。この商品生産者の行為は、毎日無数にくり出されています。

当事者たちにはもちろん、この行為は、自分の生産物を売ってお金に代え、そのお金で自分に必要な商品を買って生活していくためのものでした。ところがこの行為がその裏面で、お金をつくっているのです。

商品生産者たちは自分たちの生産物に価格をつけることで、自分たちの商品の価値を貨幣で表現します。だからこの行為は、貨幣に対して自分の商品に対する購買力を与えます。市場に登場した人々が皆同じことをします。彼らは意識せずに貨幣生成の共同行為に参加しています。そうです。彼らはいったん貨幣になった商品金で、自分の商品の価値を表現することで、日々新しく、金に貨幣としての力を与えているのです。

5) お金の謎と物神性

マルクスは、事態をこのように説き明かしましたが、同時にこの解明が、日常的意識には受け入れられないことも自覚していました。マルクス自身が商品や貨幣の物神性と名づけた、これらのものの謎的性格が、事態を転倒させ、混乱させているのです。

例えば、貨幣の購買力は、全ての商品が貨幣商品でその価値を表現することの帰結として、貨幣に与えられたものでした。ところが、日常意識では、貨幣に価値があるから商品が買えると思われています。これが貨幣の物神性です。

先に見たように、貨幣の秘密は、小麦と

交換関係にある鉄が、金属としての鉄でありながら、それが抽象的人間労働の体化物として、価値の化身とされているところにありました。この事態は実はこの関係のうちでだけのことですが、しかし、価値の現象形態が目に見えませんが、日常意識には小麦を買う力が交換関係という社会関係から生まれているとは見えませんが、鉄そのものの属性のように見えます。この見せかけは、貨幣が生成されると完成され、金は価値があるから貨幣となり、そして、他の諸商品を買えるのだと思われてしまいます。

お金をかえようと考えるとき、いつも問題になるのがこの物神性によって、本当のところが見えなくなっていることです。

6) ソ連は何故崩壊したか

エンデはマルクスの最大の誤りを「資本主義を代えようとしなかったこと」に求めていますが、マルクスが『資本論』で、せっかく、貨幣がどのように生成されたかを明らかにしたにもかかわらず、それを代える方針を出せなかった、という意味で、このエンデの見解は理解できます。

というのも、マルクスの方針は、労働者階級が政治権力を奪取することからしか社会革命は始まらないと考えていて、商品、貨幣を政治権力の力で廃止しようとしていたからでした。しかし商品からの貨幣の生成が商品生産者たちの無意識のうちでの本能的共同行為にもとづくものである以上、これを法律や強制といった意志の力で廃絶しようとしても無理がありました。そしてソ連の崩壊の要因は色々ありますが、この問題が根本問題だったのではないのでしょうか。

7) 社会的無意識を変えること

資本や貨幣はエンデもいうように人間が

つくりだしたものです。人間がそういうものの発生する条件をつくりだしたから、この世に生まれてきたのです。ですから、発生する条件をなくしてしまえば、これらは無になります。

人間がつくりだしたのも、法律のような約束ごとですと変えることは比較的簡単です。しかし人間のつくり出すものには、社会的無意識によってつくり出されているものが多々あり、これを変えていくには意志の力ではどうにもなりません。長い間に蓄積された生活の変化が、突然社会的無意識のあり方を変える、というときまで待たねばならないのでしょうか。例えば、貨幣が商品生産者の無意識のうちでの本能的共同行為によって生成するものであることがわかれば、貨幣廃止の法律をつくるのではなく、迂回して、貨幣が発生しないような交易関係をつくり出せばよいのです。けれどもこれは別の物語、また別のときに話しましょう。

第10章 科学知と芸術知

1) 形象理念

エンデの芸術論について、芸術は説明できず体験できるだけだ、という見方と、質をどう捉えるか、という点からのこの見方の補足についてはすでに第4章と第5章でふれました。ここではエンデが科学知と対比する形で芸術知について述べている部分に注目してみましょう。

『エンデのメモ箱(下)』(全集19巻)に収録されている「世界を説明しようとする者への手紙」で、エンデは、科学知のみならず、哲学や神学も含めた認識する知に対して、芸術知は体験が問題だとし、次のよ

うに述べています。

「どの認識も、哲学のそれも、自然科学の、神学の、精神世界的なことのそれも、結局は、ある説明が最終の目的だ。少なくとも、何も説明しない認識がどんなものか、ぼくは知らない。分野を問わず、認識理念とはつねにさまざまな連関や作用の効果や秩序構造についての直感による知覚なのだ。そこから生じる説明(あるいは悟り)は明確さをもとめる。つまり明白さだ。芸術人間も——画家や彫刻家や音楽家だけではなく、作家や詩人もぼくはここにを入れる——認識なしでやれないことは言うまでもない。芸術人間はそれを必要とするが、同時にどの説明もどの明白さも信用しない。芸術人間の課題は、経験を表現することだ。そして、経験は——善いことも悪いことも——けっして明白ではない。それだから、芸術家は形象理念を得るため努力する。それを芸術家は隠された深みから明らかな世界へとこび出さねばならない。むしろ形象理念自体はまだ芸術ではない。それを感性で知覚できる形式で適切に具体化して、はじめて芸術となる。つまり、芸術人間は対立する二つの極——理念と感性——に関わっている。この両極は最大の緊張関係にある。理念、つまり超感性的なものが感性的なものと同じでなければならない。

それゆえ、芸術家や詩人にとって大事なものは世界の説明ではなく、さまざまな世界を表現することなのだ。」(全集19、174～5頁)

超感性的な形象理念に感性で知覚できる形式を与えるものが芸術だ。エンデの主張を一言でいうなら、このように表現できるでしょう。そこで問題になるのが、形象理念です。これが哲学で言う対象に対する知識としての概念のようなものとされているわけではありません。エンデの言う形象理

念とは、対象が持つ個々の形式の裏にひそんでいる対象の隠された実在のことです。エンデは「隠れているものの実在」というメモで、タンポポを例にして次のように述べています。

タンポポという、ひとはそれぞれ葉っぱだとか、黄色い花だとか、綿帽子だとかの外観を思い浮かべます。でもこの外観のなにがタンポポなのでしょう。言うまでもなく、みんな一緒にしたものがそうで、タンポポとは毎年繰り返される生きたプロセスで、どの段階も時のなかにあり、過ぎて行きます。

「それは、わたしたちがタンポポとよぶ実在の、多様な状態のひとつであり、つまり本当は実在しないか、あるいはそのきわめてささやかな瞬間の観点に過ぎないのではないだろうか。そのタンポポと呼ばれる実在は、時を越えた全体として、これら数多い外観のうしろにある。五感はその知覚できない。五感がわたしたちに知らせるのはいつも、外に現われた現象のある一瞬の状態にすぎないからだ。そもそもわたしたちは本当のタンポポを知覚できるのだろうか？」(全集 19、144～5頁)

エンデはタンポポのたくさんの外観のうちひそんでいる全体を精神世界に属するものと見ています。もちろんこの精神世界とは、人間の観念の内にあるものではなく、その外にあり、タンポポの物質性を越えた存在性を指しています。つまりエンデは物質に物質性を越えた存在性を承認し、それを精神世界と名付け、そこに形象理念を見出そうとしているのです。エンデは本当のタンポポを知覚できるだろうか？と自問したあと、次のように述べています。

「わたしはできると思う。ちょっと辛抱よく幾度も繰り返し、タンポポという生きたプロセスを心のなかで”演じて”みれば、

なにか全体が感じ取れるだろう。この全体は部分の総和以上に、それを越えたものだ。これもたとえにすぎないが、タンポポのそのときどきの姿からは、なにか顔つきのような印象を受ける。それを通じて、その背後にある本質的なものが現われる顔つきである。また、世界中のどのタンポポにも、いつも一つの同じ本質が現われているのに気づくだろう。つまり、それは時間を越えているだけでなく、場所をも、いや空間をも越えていると言うほうがよいだろう。それが実は本当のタンポポなのだ。」(全集 19、145頁)

エンデのこのような考えは、現象の背後にある本質的なもの、つまり本質的な概念を指していると捉えられるかも知れません。この場合の本質的な概念とは、人間が頭の中で組み立てた精神的なものです。しかし、エンデが精神世界と規定しているものは人間の精神活動のことではなく、物質それ自体にそなわっている精神性でした。タンポポという物質的なものが見せるさまざまな外観のうしろにある全体的なものは、物質的なものではなく、従って精神的なものと言う他はないのですが、この精神的なものが実在するとエンデは考えているのです。そして、この精神的なものを五感を越えて捉えたものが形象理念だということになります。

2) 美とは何か

エンデの形象理念は一見してオカルト的なものに見えますが、しかしエンデは自然科学などの認識知を否定したり、あるいはそれを越えた知として、このような隠れているものの実在を捉えているわけではありません。それはあくまでも芸術家にとっての知の枠組みとして述べられているのです。しかもエンデがこのような事柄について述

べようとするとき、「心持ちのわるさにはげしくおそわれている」(全集 19、199頁)のです。

というのも「本質的には概念ではとらえられぬことを、概念を通じて表現しようとするとき、いつもそうなのだ。それは正しいし、同時にまちがいでもある。芸術と詩を説明するのは、結局これまた芸術と詩だけなのだ。そして芸術と詩を正当化するのは、その存在のほかになにもない。」(全集 19、179頁)

「概念ではとらえられぬことを概念を通じて表現しようとする」とか「理念、つまり超感性的なものが感性的なものと同じでなければならない」(全集 19、175頁)とかいったエンデの芸術論の根底にある問題意識は文化知の定在と深くかかわっていますが、ここではもうすこし、エンデの芸術論を見ていきましょう。

メモ箱には、国際児童図書評議会東京会議での講演が収められています。これ自体一つの物語であって「どの人間にも遊びたい子どもがひそんでいる」(全集 19、15頁)という小結に導いていく過程を要約するのは野暮だという気がします。それで「なぜ子どものための本を書くのか」という会議のテーマに「わたしを書くことへとかりたてる、まことの原動力は、ファンタジーの、自由で意図がない遊びの楽しみなのです。」(全集 19、15頁)という回答を用意していたエンデが一般になされる二通りの回答を批判しているところから見ていきましょう。

一つの答えは神秘的なもので、例えば「詩人は書かぬわけにはいかないのだ。内なる使命、神の召命がかれをそうかりたてる。書く事がゆるされなければかれは死ぬだろう」というようなものです。もう一つは理性的な根拠づけで「芸術と文学は、それが

啓蒙の機能をはたすときだけ存在理由がある。その課題は、現実を変えるためにその現実の写し絵をつくることだ。つまり作家はその読者にとり、一種の教師でなければならない」というようなものだ、とエンデは述べています。

この後者の考え方を念頭において、エンデは「意図がない遊戯を人間の自由と尊厳の本来の領域として讃える」(全集 14、17頁)ことを提案し、ついで「遊戯が遊戯であるかぎりには、そこに倫理的問題が問われることは一切ありません」(全集 19、18頁)ということで文学が啓蒙の機能をはたすべき、という主張に反論していきます。

劇で、ある婦人が男に打ち倒されたといつて、誰も助けに行こうとはしません。「すべては架空の出来事であり、だからそこでは善も悪も同じ権利を持っていることをあなたは知っています。劇という遊戯がおこなわれている間、あなたは倫理の必要性がある全体の外にいるのです。まさにそここそ芸術鑑賞における自由の体験があるのです。そして芸術とは遊戯の最高の様式だと、わたしは理解しています。」(全集 19、18頁)

では倫理性からはずれた領域での、自由で意図がない遊びの意味はどこにあるのでしょうか。エンデは芸術に治療の課題があることに注目しています。

「真の芸術、真のポエジーは、いつも頭と心と五感の統一体から生まれ、それを受け取る人間に、この統一体を再建します。つまり、それはその人を治す、治療するのです。名コンサート鑑賞したとしましょう。そのあとみなさまはさらにりこうになったわけではありません。しかし、みなさまは、統一体を再建する何かを体験したのです。みなさまのなかで、それまで救いがたく切り離されていたなにかが治ったのです。」(全

集 19、19～20 頁)

治す、といっても、統一体の再建という
意味ですが、エンデはさらにこれを美と結
び付けます。

「意図がない遊戯だけが、この頭と心と五
感から成る統一体をわたしたちにもたらし
てくれます。その深い本質において、これ
が美以外のなものでしょうか？」(全集
19、21 頁)

ではこの美とは何でしょうか。エンデは
シラーの『人間の美的教育に関する書簡』
に依拠しながら自由な遊戯においてだけ美
の尺度は絶対的な有効性をもつことが許さ
れると述べた後、今日、芸術が美の要求を
掲げようとしなくなったことに言及し、次
のように述べています。

「美はその本質において超越的なもので
この此岸の世界からだけでは、それはまる
で把握できないのです。美は客観化できま
せん。いいかえれば、美は測ることも計る
ことも数えることもできないのです。美が
知覚されるためには、美を知覚できる人間
が必要です。」(全集 19、23 頁)

美が知覚されるための人間を必要とする、
ということから、美をただ主観的な体験に
すぎない、という考えが、物質主義の思考
のなかで生まれ、美への間が相対化され、
美そのものは全く存在しないとされるよ
うになってしまつてことに抗議して、エン
デは次のように述べています。

「美とは、その本質において超越的なもの
だと、わたしは言いました。つまり此岸の
この世界だけではまるで把握できないもの
なのです。それは、いわば別のさまざまな
世界からこの世にふりそそぐ光であり、そ
のなかですべての事物の意味が変わります。
美の本質は謎にみちており、不思議なもの
です。美の光のなかで、この世界の俗物性
はもうひとつの現実の啓示となります。も

うひとつの現実からわたしたちはみんなや
って来たのであり、またそこへもどります。
そしてこの世に生きているあいだは、もう
すっかり忘れてしまったにもかかわらず、
わたしたちはそれをあこがれ続けるので
す。」(全集 19、25 頁)

タンポポを例にして語られた精神世界が、
ここでは、科学的に捉えられた世界の物質
性とは別のもう一つの現実として提示され、
それが美の本質として述べられています。
このあと、エンデは自然科学的な宇宙論や
世界観について紹介したあと、「このよう
な世界像からは、もはや倫理的、宗教的、
美的価値をみちびきだすことはできません」
(全集 19、27 頁)と批判し、「このよう
な世界観に対して別の世界観をうちたて
ねばなりません。世界にはその聖なる秘密
を、人間にはその尊厳をとりもどしてくれ
る世界観です。この課題では芸術家や詩人
や作家が大切な役目をはたすことでしょ
う。芸術家や詩人や作家の仕事とは、生に不
思議な魅力や秘密を与えることだからで
す。」(全集 19、27 頁)と述べています。

3) なぜ子どもたちのために書くのか

これまで紹介してきたエンデの芸術論の
しめくりにはユーモアの問題が提出され
ています。

「ここでわたしは四段目、終わりの段階に
入ります。わたしはなぜ子どもたちのため
に書くのか、あるいは、わたしがそもそも
なぜ書くのか、それについて語れと言うこ
とでした。ファンタジーの、意図なき自由
な遊戯というのが、わたしのはじめの答え
でした。この遊戯から美の尺度がうまれま
した。そして美は不思議や奇跡や秘密にみ
ちたものへとわたしたちをみちびいたので
す。この三つの概念をいわばわたしの詩的
風景の東西南北としてみれば、まだあとひ

とつ足りません。それがユーモアなのです。

みなさま、お聞きのように、わたしがこ
れまで話したことは、それでも一種の独断
論へとさそいかねません。それは作家を読
者の教師に、読者に対する精神世界の教師
にしかねないのですが、そうすると作家は
純粋に芸術的手段以外のもので影響をあた
えることになります。それで作家はふたた
び、かれのメッセージの宣伝者となり、ポ
エジーを包装紙のように利用するだけです。
それこそは避けねばなりません。

そこに救いの手をさしのべてくれるのは、
ユーモア、ただこれだけです。」(全集 19、
27～8 頁)

たしかに意図なき自由な遊戯という思想
はアナーキズムを導き、美の定義は芸術至
上主義に導き、不思議や奇跡や秘密にみち
たものの承認はオカルトの世界を開きます。
エンデはこのような展開のされ方に批判的
で、このような展開にならない保障をユー
モアに求めているのです。

「言うまでもなく、ユーモアが何かとい
うことも、あますところなく定義することは
できません。ユーモアもまた計れないし、
数量化できないのです。ユーモアをテスト
できないのはいうまでもありません。意図
する手からは、するりと逃げてしまいます。
ユーモアは狂信的でも教義的でもない。そ
れはいつも人間的だし、やさしい。ユーモ
アとは、自分の不完全さを苦渋に悔いるこ
となくみとめ、気持ちを楽にしてくれる、
あの意識の姿勢です。そしてまた、他人の
不完全さも微笑んでうなずける。ユーモア
は英知と同一ではありませんが、とても近
しい親類関係にあります。」(全集 19、28～9
頁)

エンデはともすれば狂信的になり、また
教義的になりがちな作家の作品をそこから
救い出すものをユーモアに求めています。

そして子どもたちが一番敏感なのは本当の
ユーモアであり、ユーモアは子どもたちに、
人は失敗するし、失敗してもいいんだと語
ってくれるからだし、さらにわたしたち
には足りないところがあるから愛されるのだ、
と教えてくれるからだといつつけ加えています。

第 11 章 意識の跳躍は実現された

1) エンデの提起を活かす

すでに第 5 章でエンデによる科学知の量
的思考に対する批判と意識の跳躍の必要性
の提起について知り、また前章で芸術知の
立場からの科学知の批判を見てきたうえに
たつて、エンデの提起を活かす道を考えて
みましょう。

第 5 章ではエンデの科学知批判の方法、
つまり客観・主観の二元論の克服は、「人
間の意識と世界とがわかちがたくひとつに
むすびついて」いる、という見地からのも
のでしたから、自我と意識を同一視してお
り、意識を自我と対象との関係と捉える視
点をもちえていませんでした。

次に、芸術知の見地からの科学知批判は、
科学知が捉えられる世界の物質制の裏に隠
された精神世界があり、科学知はこれを捉
えられない、という内容になっています。

でもここで人間の社会そのものを二重化
したものと捉える文化知の観点を導入した
らどうなるでしょうか。エンデのいう量の
思考や認識理念は、商品や貨幣や資本によ
って歪められた思考であり、自然物そのも
のが社会的性格をもつことで、はじめて人
間が社会関係に入っていけるという転倒し
た現代社会の人間関係によって生み出され
ています。にもかかわらず、エンデによる
量的思考や認識理念への批判は、人間の社

会性のあり方へと向わず、対象そのものが量的思考や認識理念によっては捉えられない精神世界という領域をもっているという提言へと向います。このような方向性を選ぶ以上は、エンデがいくらユーモアを呼び出してもオカルトの世界を開いてしまうことにならざるをえません。

人間の思考自体が、人間の社会性のあり方によって歪められている、というように問題をたてれば、人間の社会性のあり方を変えていくことで、思考の歪みを治していけるであろうし、また人間の社会性のあり方を変えていく、という実践知の領域が開けてきます。エンデは芸術家としての芸術的実践が社会変革のための実践とは異なることを正当にも強調しましたが、他方で社会変革のための従来の実践については、その可能性について否定的にみえています。そのため、芸術的実践がもたらすであろう意識の跳躍にしか期待できなくなっています。でもエンデがこの考えをもつに到った 80 年代初めとちがい、今日では従来の実践知とは異なる新たな実践知がその姿を見せ始めています。この事態について考察してみましょう。

2) エンデのイメージ

私は、エンデが期待していた「意識の跳躍」は、今日ある意味では実現されていると考えています。もちろん、エンデが予想していたような形ではありません。それで、意識の跳躍についてのエンデのイメージから見てみましょう。テキストは、『オリブの森で語りあう』(岩波同時代ライブラリー)です。

まず意識の跳躍を期待するに到るエンデの発想を整理してみましょう。エンデは今日の社会を「経済システムが一本立ちしてしまっている」(26 頁) 社会と捉えていま

す。誰もそのシステムの舵をとらないし、またとれない。このことに気付きながら誰もがだんだん早く回転するメリーゴーランドに乗っているように、なりゆきにまかせている、というのです。

このような宿命にとらわれた社会を打破する方向性として、エンデは「経済というのは文化の問題として理解すべきだ」(28 頁)と主張しています。ここで語られている文化とは「ライフスタイル、価値観——こういってよければ——生活態度の共通性」(34 頁)ということ。「時代とか社会がもっているもの」(34 頁)です。経済を調整するものはこの文化しかないのではないか、というのがエンデの考えでした。

そうすると、この文化は対談がなされた 1982 年頃には「世界史全体のなかで本当の跳躍点に立っている思える」(34~5 頁)ようになっていました。この点についてエンデは次のように述べています。

「現在も進行中だけど、ここ 4, 5 年のあいだにはっきりしてきたこと。それはね、一般に考えられているよりはるかに深いところで進行している意識の変化なんだ。ぼくたちは、あるひとつの発達において、とうとう終点にきてしまったんじゃないか、というのが実感だね。」(36 頁)

エンデの念頭にある意識の変化は、マテリアリズム的な世界観に代わるもので「人間の意識と世界とがわかちがたくひとつに結びついて」(37 頁) いるというもので、質という概念を考え直すということでしたが、この内容は第 5 章で紹介しました。ここでは、この意識の変化がどのようにして起こるかということについてのエンデの予想を見てみましょう。

「現代の思考を一次元的なものにしたプロセスの正体がきちんとわかれば、もうそれだけで、新しい思考が生まれてくるものか

どうか。ぼくにはわからない。ただね、一種の突然変異が思考におきなければならない。『意識の跳躍』が必要だ、とは考えている。」(43 頁)

「世界史の舞台においても、戦いの機が熟した瞬間というものがある。いわば運命のほうで、戦いのお膳立てをすっかりととっているわけだ。」(49 頁)

エンデはこの意識の跳躍を、単に現代の思考を否定するだけのものとは考えていません。ましてや思考のうちでだけでの跳躍でもありません。エンデが手がかりにするものは、現代の思考をゆきわたらせた「工業技術というのは、人間の共同体が創造したものであり、多くの人々の共同体的作業や成果があるからこそ、自由に使いこなせるようになっていく」(50 頁)という事実であり、にもかかわらず、この工業技術を応用した経済が人間の統制を受けつけなくなっているわけですから、必要なものは「自分の人生がこの世でひとつの意味をもち、全体は大きな意味のなかでつながっている」(76 頁)と感じさせる文化にもとづいて共同体を再建することでした。シュタイナーの社会有機体三層化説をエンデが評価するのもこの考え方とかかわっています。

そこで出てくる課題は、一昔前は進歩的だとみられたことですが、既成の価値を破壊するというのではなく、価値を提案することではないのか、とエンデは問うています。

「ところが現代では、どこをさがしても価値なんてところがない。ずっとまえにみんな破壊されてしまったからだ。ところがあいかわらず、大げさに革命家ぶったり、荒らぶったりしながら価値をこわしつづけている連中がいる。それは新しい俗物だ。だが今日では価値を提案するほうが、ずっと進歩的だし、はるかに大きな勇気もいる

んじゃないか。博物館のように過去の文化を回顧するという意味ではない。過去の文化の再現など、できっこないからね。そうじゃなくて、新しい共同性を発見することが、ぜひとも必要だからなんだ。」(95 頁)

エンデの提起している「新しい共同性」とは、すでに存在している共同体やあるいは共同体のイメージではありません。それは何よりも文化の問題であり、価値の問題として捉えられています。そしてその中味は、まさしく、現代の思考に代わるもう一つの思考を提案することでした。

「まさしくそういう『意識の変化』を、ぼくたちは思想として理解しなくてはならない。それに適切な名前を付けなくちゃならない。まったく新しいやり方で、人間の意識は、あらゆることにおいて、自分というものを知覚しはじめていく。」(109 頁)

エンデはハイゼンベルグやゲーテの言葉を引いて、この意識の新しいあり方について説明していますが、その内容については次節で検討しましょう。ここでは、意識の跳躍についてのエンデのイメージを知るのにふさわしい言葉でしめくりましょう。

「だがね、ある種の新しい能力というものは、ときにはきわめて唐突に、ときには跳躍的に、多くの人々のあいだにひろがっていく。文字どおり精神の稲妻のように出現するわけだ。たとえば 16 世紀に主知主義という能力がひろまるまえには、たしかにだれも、そういうものが可能になるとは考えられなかった。けれども 30 年のあいだにこの新しい能力はヨーロッパの多くの人々のものとなった。今日では結局、どんな農民でも、中世の学識ある紳士なんかよりは、はるかに知的だよ。16 世紀以来それは、まさに一般大衆の能力となった。ぼくが思うには、同じようにして、いままた

新しい「心的能力」がひろがりつつあるんじゃないか。それは手でさわって確かめることができるほどだ。予言的本能のようなものがあらわれてきている。それは、人びとの心のなかに新しい力として浮かび上がってきている。今日いたるところで意識下の不安が感じられているが、まさにそれだって、新しい心的能力が誕生するときの陣痛じゃないだろうか。」(114~5頁)

エンデは意識の跳躍について、このようなイメージを描いていました。このイメージでは明らかに意識の跳躍と世なおしとが結びつけられています。現実はどうでしょうか。エンデの期待した通りではないにしろ、意識の変化は明らかに認められます。ただそれがストレートに世なおしには結びついていません。意識が変わることはたしかに世なおしの条件でしょうが、世なおしが実現されるためには、意識の変化以外の諸条件がみたされねばならないのでしょう。この意味で、今日では、変化した意識の下での社会運動の展望を描き出すことが必要となっているのではないのでしょうか。

3) 今後の課題

エンデは現代の主知主義が主体と客体という二元論からなるマテリアリズムにおかされていると見、そしてこの発想から問題をつきつめていくと、結局は自分につきあたり、「人間の意識とは何か」という問の前に立たされると述べています。「ぼくたちは『客観的』現実をさがしていたまさにその場所で、ぼくたちじしんの意識を、鏡に映しかえされるようにして手にいれる。」(109頁)これが現代の主知主義の限界だとエンデはみているのですが、この限界で自分に返ってくることについて、エンデはゲーテの「何も内側にはなく、なにも外側にはない。内側にあるものは、外側に

あるのだ」という言葉を引いて、これを「じつに精確に表現している」(109頁)と評価しています。

この思考の限界を文化知からみれば、どうなるでしょうか。この限界は人間の思考が言語記号を媒介にしていることとかかわっています。人間は対象を認識しようとするとき、対象と主体の間に両者を関係づける意識を働かせますが、その際、この意識が言語記号によって社会的意識形態として自立させられています。この媒介者である社会的意識形態からすれば、内側である主体のなかには何もなく、また外側である対象のなかにも何もありません。そこには内側にある意識と外側にある対象とが結びつけられた第三者があり、そこには内側にあるものは外側にある、という構造を見出すことができます。

言語記号のこの二重性に気づいた人は、ソシュールでした。ソシュールは言語記号をシニフィアン(音響心象)とシニフィエ(概念)が紙の裏表のように結びついたものと捉えました。この言語記号の二重性が、言語によって構成されている社会的意識形態に内側と外側とを結びつける働きをもたらしており、こうして人々はこの社会的意識形態を媒介にして、自らの意識を交流させあうことができるのです。

ではどうしてこのようなことが可能なのでしょうか。それは言語自体のなかにコミュニケーションの機能が含まれていることを解明することによって明らかにされるでしょうが、このようなことはいまだかつて試みられたことはありません。従来 of 学説では、言語はコミュニケーションの道具とみなされていて、言語自体にコミュニケーションの機能を発見するという研究はなされてはいないのです。ところで、この新たな試みに挑戦しようとするとき、非常に有

力な手がかりがあります。それこそは、マルクスが『資本論』で解明した価値形態論に他なりません。

マルクス以前の経済学では貨幣は交換の道具と捉えられていて、貨幣自体に商品交換の機能が含まれているとは考えられていませんでした。もし、貨幣に交換の機能が含まれていると捉えるならば、商品自体にその要因を求めなければならなくなります。商品の価値形態とは、商品に含まれている交換の機能の表現であり、マルクスは、貨幣を商品の価値形態の発展の極にある貨幣形態として示すことで、貨幣に商品交換の機能が含まれていることを明らかにしたのです。

マルクスが商品の価値形態の秘密について解明したにもかかわらず、後に続く経済学者たちは、このマルクスの作業について理解できませんでした。マルクスの価値形態論は経済学者にとってはずっと謎のままでした。というのも、マルクスは価値形態の解明にあたって、科学知の方法を超えた方法(これを文化知と呼びますが)を採用していたので、科学知の方法しか知らない今日の経済学者にとっては理解不能だったのです。

ところでエンデは眼に見えないものの実在を主張した人でした。もしエンデがこの眼に見えないものを、眼に見える諸物の関係において、人間の社会性が現象するそのような現象形態と捉えていたらどうなったのでしょうか。そうすれば、マルクスの価値形態論はその核心において理解されたこと

になります。

二つの商品の価値関係にあっては、二つの商品の使用価値は眼に見えますが、価値の現象形態は眼に見えません。しかし、商品は、価値の現象形態をとることで、交換の機能をもつのですから、この眼に見えない価値の現象形態を解明することなしには、交換の機能を解明することはできません。そして、この現象形態は、自然物に社会的な力を与える形態規定の論理によって認識することができます。

このマルクスの価値形態解明の方法を言語記号の解明に用いるとどうなるでしょうか。ソシュールが発見した言語記号の二重性を出発点に置いてみましょう。言語記号をシニフィアンとシニフィエの二重性と捉えたソシュールの地平からの第一歩は、言語記号による名づけに際して、記号と対象との間に眼に見えない現象形態の実在を想定することです。そうすると、言語記号はこの現象形態によって形態規定されて、単なる音でありながら、社会的なものである概念の化身とされていることが解ります。このことが解れば、人間は発話にあっては、単なる音をやりとりすることで、概念をゆききさせていることが簡単に了解できます。

このようにエンデの提起から出発し、それをより豊かなものにしていく方向性をしめしましたが、ここで、この研究をより稔りあるものとするために、エンデが非常に高く評価しているゲーテの世界観をみていくことにしましょう。といっても、これは次回のお楽しみです。

<地域通貨> LETS とは何か

1) はじめに

1999年5月4日、テレビ番組「エンデの遺言—根源からお金を問う—」が放映されました。この番組を契機にして、日本でも地域通貨が話題にされはじめました。その後、7月には『批評空間』II-22号が出版され、それに、西部忠の「<地域>通貨 LETS 貨幣・信用を越えるメディア」が掲載されていました。この論文は後に『可能なるコミュニズム』(太田出版)に収録されます。西部論文は地域通貨とは何かについて、日本で始めて真正面から論じた力作で、この論文によって、LETS に共感する人々は増えてきました。そして、NHKのテレビ番組を土台にして、本年2月には『エンデの遺言』(NHK出版)が出版され、そこで紹介されているイサカアワーや交換リングを知ることで、地域通貨が身近なものとなってきています。

このようなメディアの動きに刺激され、日本の各地で地域通貨をたち上げる試みが始まりました。震災からの復興に私たちもかかわった神戸市では、コミュニティ・サポートセンター神戸(CS神戸)の中村順子さんが、地域通貨「らく」を始めましたし、また、京都でも、スタディ・ユニオンとアソシエ 21 関西運営委員会が中心となって、来年1月に LETS を発足させようと準備会が持たれています。そして、研究会の有志もこの準備会にかかわってきました。準備会では、LETS 体験ワークショップを3回実施しましたが、これは「目からウロコがとれた」と、参加者には好評を得ています。この準備会の経験をふまえ、地域通貨

の一種に分類されている LETS について紹介していきましょう。

2) 地域通貨の歴史

1832年にロバート・オーエンが始めた労働交換券が地域通貨の始まりと言われていいます。その後も色々な試みがありましたが、ある程度社会的影響力を發揮したのは、1930年代でした。この頃は1929年に始まった世界恐慌で大量の失業者が生み出され、他方で、通貨は不足していました。このような状態の中で、地域通貨を創出することで、地域での雇用を生み出そうという努力がなされたのです。

この時期の地域通貨に影響を与えたのがシルビオ・ゲゼルの劣化する貨幣論でした。ゲゼルは商品はみな時間がたてば劣化していくのに貨幣だけはそうではないというところに大きな問題点を見出し、スタンプ貨幣という劣化する貨幣を提案しました。これは月の定められた日に、スタンプを買って貼らないと通用しないという紙幣で、人々は貯めこんでも仕方ないので、ドンドン物を買ひ、貨幣の流通速度を上げることになり、地域の経済を振興しようとするものでした。この試みは、いくつかの成功例をもたらしましたが、しかし、中央政府の干渉によって、発券が禁止されてしまいました。

3) 現在の地域通貨の起源

現在の地域通貨は、ゲゼルのスタンプ貨幣とは別の種類のものとなっています。大きくわけて紙幣を発行する発券方式と口座登録方式があります。LETS は、口座登録

方式ですが、これを始めたのは、マイケル・リントンでカナダのバンクーバー島にあるコモックスヴァレー(人口約6万人)で1983年に立ち上げています。これは通貨を発行するのではなく、参加者が口座を共同で管理するシステムで、事務局が作成した目録をみて、会員同士が事務局を通さずに連絡を取り合って取引を行います。この取引は成立後、事務局に報告されますが、そのとき提供した人の口座にプラスの値が記入され、提供を受けた人の口座にはマイナスの値が記入されます。この方式は物やサービスを貨幣を媒介にして交換する市場や二者の間の取引に限られる物々交換ともちがって、多角的な労働交換を実現しています。このシステムはイギリスやヨーロッパ大陸諸国で普及し、世界の地域通貨で最も多く採用される方式となっています。

他方、発券方式で成功したのが、1991年に始められたイサカアワーズです。人口2万7千人のニューヨーク州イサカ市は、学園都市ですが、ここでは地域コミュニティの経済的振興を目的として、管理委員会による地域通貨の発行を行いました。このシステムの特徴は1アワーを10ドルにリンクさせていますが、その根拠を平均賃金から決定しており、労働時間による交換制への接近を展望している点です。

発券方式は、後に、カナダのトロント市ではトロントダラーに、アルゼンチンではRGTとして急速に拡大しており、会員数や取引高では単独の地域通貨としては上位に位置しています。

4) LETS の意義

LETSとはLocal Exchange Trading system(地域交換取引制度)の略称です。紙幣を発行する発券方式だと、自治体などによる通貨の保証が必要ですので、既成のコミュ

ニティを必要とします。ところが、LETSの場合、取引を希望する口座の持ち主が、事務局に委任する形で口座を共同管理していますので、それ自体がコミュニティとしての性格を持っています。

LETS 自体がコミュニティとしての性格をもつ、というとき、それは近代以前に存在していた村落共同体のような、生活丸ごとのコミュニティではありません。LETSは加入脱退が自由ですから、参加者の自由と独立は保障されています。そして、当分の間は、生活のごく一部分をリンクされたところに成立しているコミュニティです。この点では、生協の共同購入の単位であるグループと似たところがあります。

でも、LETS の場合、生活のごく一部とはいえ、労働して作った財や、サービスという労働そのものを提供しあうコミュニティであり、労働交換のシステムですから、働き方という生活自体の欲求に根ざしたものです。ワーカーズ・コレクティブは、大勢で出資して共同労働する職場ですが、LETS の場合、参加者一人一人がワーカーズとして、お互いに関係しあえるのです。

このように見てくると、LETS はワーカーズ・コレクティブと同じように、「もう一つの働き方」を実現していると考えられます。この意味で、LETS というコミュニティに参加すれば既成の働き方(賃労働)を相対化できるようになるのではないのでしょうか。

ところで LETS がコミュニティとしての性格を持つというとき、参加者の意識やシステムのパターンのことを指しているわけではありません。LETS に参加するとき、別にコミュニティに参加するという意識性が問われるわけではないし、LETS のシステムをコミュニティだといって宣伝する必要もありません。LETS にコミュニティと

しての性格をもたらすものは、実は取引をすることによってであって、LETSでの取引がその成員にコミュニティの一員としての意識を生み出すのです。

5) LETS 体験ゲーム

LETSのコミュニティとしての性格が交易それ自体にあることを教えてくれたものが、準備会でのワークショップでなされたLETS体験ゲームでした。毎回20名近くのメンバーがフリーマーケットに店を出すという想定で、実際の取引をLETSで体験してみました。LETSでは最初は自分の口座はゼロですが、フリーマーケットに何か欲しいものがあれば、手持ちがなくても提供してもらえます。そのとき、提供した人の口座にプラスが、提供してもらった人の口座にマイナスが記入されます。

フリーマーケットでは、人から提供されるばかりで、どんどんマイナスが貯まる人や、また提供するばかりで、プラスが貯まる人が出てきます。そこで、市場の感覚からすれば、マイナスばかり貯めて、食い逃げする人が出てくるのではないかという心配が生じます。ところが、金銭での売買とは異なり、LETSではマイナスを貯めて逃げた人がいたとしても、提供した側にはプラスが記入されているのでメンバーに損失はありません。損失は個人にではなくて、LETS全体の帳尻がマイナスになる、という形になります。

手持ちがなくても財やサービスを提供してもらえらるという点と、マイナスを貯めても、個人に対しては損失を与えていないという点がまず、「目からウロコが落ちる」体験でした。次に、ゲームでマイナスを沢

山貯めてしまった人が食い逃げをする時の感覚とは全然違うと言い出しました。つまりマイナスを返さないのが得だという気持ちではなく、自分がどのようにすれば財やサービスを提供できるかということについて真剣に考え始めたということです。つまり、マイナスを貯めた人は、交易を通して、LETSというコミュニティの一員としての行動をしようという意識に到達したのでした。

6) LETS と地域づくり

地域づくりは、この間協同組合がずっと課題としてかかかってきました。生協運動としては、ワーカーズ・コレクティブや福祉の分野での事業の展開がその手がかりとされてきました。ところが、ワーカーズ・コレクティブにしても、福祉の事業にしても、改めてコミュニティを作る、という意識性が問われます。ところが、今日では過去に存在していた村落共同体を再建できる可能性はなく、問われているのは、個人の自由と独立を保証した上での協同性です。これは、共同購入などの具体的目標があれば実現できますが、地域でのコミュニティづくり、となると具体的なイメージが描けませんでした。

LETSでの取引が自ずからコミュニティ意識を形成し得るとすれば、これまでもう一つ具体的なイメージがつかめなかった地域づくりの方法が具体的なものとなると思われます。協同組合が、コミュニティ意識を自ずから育むLETSを上手に採用することで、これまで実現してきた産直や共同不買から、さらに、進んで働く場づくりと地域づくりを一体のものとして実現していけるのではないのでしょうか。

後 記

このところ、LETS立ち上げなどの実践活動の領域が広がり、実践に必要な諸文書の作成に追われています。1年位前に構想していた綱領草案の解説文の作成や、信用論の研究については、手つかずのままです。しかし、この年齢になって、実践的な活動の領域が広がることは非常に嬉しいことで、迷いはありません。今回のモモ論も、たびたびの中断で読みにくいものになっているかも知れません。でも、モモ論については、忙しいなかでも書き続け、すこし余裕の出来たときに書き直して、単行本にしたいと考えています。

